On the Inanimate Subject Causative Sentences in Chinese that Describe Adhesion of Foreign Substances to the Body

Fei Li

Abstract

The *Inverted Causative Structure* in Chinese—famous for its unusual word order—has been explored by linguists interested in the linguistic theory of causativity or thematic relations. However, there exists ambiguity regarding the situations in which people can, or cannot, apply this construction. Additionally, it is pertinent to examine how an inanimate thing, used as an object of a verb, can stand as the subject in this construction.

This study investigated the sentences that describe the situation where touching something causes a foreign object to adhere to the body of the agent. In addition to the inverted causative structure, two other constructions can also describe the same adhesion situation. These three types of constructions are as follows: ① S V 了 一 N 異物 (foreign substances), ② V 了 我 一 N 異物 (foreign substances), and ③ S (inanimate subject) V 了 我 一 N 異物 (foreign substances). Among them, type ① is the most normal expression to describe the whole adhesion event. Type ② is a marked construction in two respects: first, it is has no subject; second, the agent 我 (I) comes after the verb. Owing to these marked grammatical characteristics, type ② is often applied when users are unable to anticipate that foreign substances would adhere to their body. Type ③ is the so-called inverted causative construction. Observation of real-life examples (sentences) on social media (Weibo) revealed that this construction can be applied only when the person unintentionally touches something—unintentionality is a necessary condition for the validity of this construction. As there is no intentionality, we have to ascribe the cause of adhesion to inanimate things, and thus, an inani-

mate ex-object becomes the subject in this construction. In addition to these three types, there is a construction that also has the inanimate subject: S（foreign substances）V 了 我 一 N. This study examined why the verb 摸 could not appear in this construction from the perspective of intentionality.

「異物付着」を表す中国語の無生物主語使役文

李　菲

1　はじめに

本論文は、「何らかの外的要因により、自分自身の体に異物が付着する」ことを表す次のような「S（無生物主語）V（動詞）了我一N（名詞）」構文について考察する。

（1）**这张桌子**　摸　了　**我**　一手　油。（孙天琦等2015）
　　この机　さわる　ASP[1]　私　手いっぱいの　油
　　「この机をさわったら、手に油がいっぱいついてしまった。」

「異物の付着」を表す（1）のような構文は、動作手である「我（私）」が目的語の位置に置かれ、一方動作対

象となるモノが主語（S）の位置に現れる点で、通常の中国語の文と異なる。（1）の文から読み取れる客観的な事実は、「私（我）がこの机（这张桌子）をさわる（摸）ことによって、手が油まみれになった」ことである。この事態において、動作主は「我（私）」、動詞は「摸（さわる）」、動作対象は「这张桌子（この机）」であるので、通常の中国語の語順ならば、次のように表すことができる。

（1'）**我**　摸　**这张桌子**，　摸　了　一手　油。
　　私　さわる　この机　さわる　ASP　手いっぱいの　油
「私がこの机をさわって、手に油がいっぱいついてしまった。」

（1'）と（1）との太字の部分を比較されたい。（1'）の主語（動作主の「我」）が上の（1）では目的語に、（1'）の目的語（動作対象の「这张桌子」）が（1）の主語となっており、（1）は「動作対象＋動詞＋動作主」という不思議な語順をもつ文であることがわかる。この動作主と動作対象の位置が反転する文は、その特異な構造から従来の研究において注目され、「倒置使役文（倒置致使句）」などの名称でよばれ、主に使役構文や動詞の意味構造の観点から分析がなされている。先行研究についてはまた次章でみていくが、本稿では（1）のような構文が表す「異物の付着」の事態に注目し、動作対象が主語に立つ（1）のような文の成立基盤およびその表現機能について考察したい。

この問題にあわせて、本稿のもう一つの関心は、（1）のような「異物付着」の事態において、事態を構成し

ている動作者（自分自身）や参与物が中国語においてどのように言語化されているかにある。例えば（1）の「机をさわって、机の油が手につく」という事態は、動作対象と動作主が逆さになった（1）の文だけでなく、通常語順の（1'）の文によって言語化することができる。さらに、主語のない次のような表現も実例では頻繁に見られる。

（1''）摸　了　**我**　一手　油。
　　さわる　ASP　私　手いっぱい　油
　　「手に油がいっぱいついてしまった。」

このほか実は、「付着物」である「油」を主語にすることも可能である。

（2）**油**　蹭　了　我　一手。
　　油　つく　ASP　私　手いっぱい
　　「油が手にいっぱいついてしまった。」

（1''）や（2）のような文は従来の研究では、あまり議論がなされていない。[2] しかし、このように、中国語では「異物が体に付着する」という事態を言語化するのに実に様々な構文、表現方法が用いられており、それらは意

味や、事態へのとらえ方においてどのような差異があるかについて考えることは大事である。本稿ではその中の一つである「倒置使役文」に焦点を置きつつ、こうした異なる表現方法間の差異について考えてみたい。(3)

2　倒置使役文をめぐる問題

2．1　倒置使役文の実態

この章では、「倒置使役文」についてのこれまでの先行研究、その問題点についてふれつつ、今回の研究課題に至った経緯や動機について述べる。筆者が「倒置使役文」に興味をもつようになったのは、ある日突然、自分が話している次の中国語の文が不思議な形をしていることに気づいたためである。

(3)　等　了　**我**　一天
　待つ　ASP　私　一日
　「一日待たされた。」

この文は、「荷物が届くのを待っていたら、ついに夜になってしまった」ときに発したことばである。「待っていた」のは自分であるので、本来なら次の「動作主＋動詞＋時間」の語順となるべきである。

（3′）**我**　等　了　一天
私　待つ　ASP　一日
「私は一日待った」

（3）と（3′）はどちらも正しい文であるが、意味は異なる。（3′）はシンプルに「一日待った」ことを表しているのに対し、（3）のほうは動作主の「私（我）」が目的語の位置にあるためなのか、「自分の意図に反して、一日も待たされていた」という被害の意味が感じられる。[4]（3）と（3′）のような対立が中国語に存在することがわかり、すぐに先行研究を調べ始めたのだが、先行研究で論じられているのはもっぱら（1）や、次のような例である。

（4）**那个报告**　写　了　**我**　一晚上。（郭姝慧2006）
そのレポート　書く　ASP　私　一晚
「そのレポートを完成させるのに、一晚かかった。」

（5）**那碗面**　**吃**　了　**他**　一头汗。（郭姝慧2006）
そのラーメン　食べる　ASP　彼　額いっぱい汗
「そのラーメンを食べたせいで、彼は額いっぱいの汗をかいた。」

逐語訳からもわかるように、（4）（5）も（1）と同様、「主語（動作対象）＋動詞＋目的語（動作主）」の構造をもつ。従来の研究はこうした文に対し、主語と目的語の文中での位置が反転した形であるとし、「反转使役結构（Inverted Causative Structure）」（Gu 1997）、「倒置致使句（倒置使役文）」（郭姝慧２００６）などの名でよんでいる。

しかしここで、動作主が目的語の位置にあるが、主語をもたない（3）のような文はどう考えればいいかという問題が出てくる。なお、（3）のような主語なしの文は、主語をもつ（4）（5）より、インターネットでの出現率が高い。李２０２１ではＣＣＬ、ＢＣＣなどのコーパスを使い、「倒置使役文」の実例検索を行ったが、実例は少ない。代わりに（3）のような主語を欠いた文が多く見つかった。ＢＣＣで検出された例を一つ再掲する。

（6）盖子　拧不开，　拧　了　我　一身汗。（ＢＣＣ）
　　蓋　開けられない　ねじる　ＡＳＰ　私　全身の汗
「蓋を開けられず、ねじっていたら汗だくになった。」

下線部の「拧了我一身汗」は（3）の「等了我一天」と同様、「動詞＋了＋動作主（我）＋一Ｎ」という構造をもち、話し手自身が「ねじる」という動作をする中で「全身汗だく」になったことを表す。（3）は「まさか一日待たされたとは」というニュアンスをもつのと同様、（6）の下線部には「まさか蓋をねじって開けるくら

いのことで、全身汗だくになるとは」という意味が含意されている。ここで注意されたいのは、下線部に主語が現れていないことである。そもそも、「ねじる」の動作対象である「蓋（盖子）」を主語にした、「盖子拧了我一身汗」が本当に正しい文として成立するかどうかは母語話者の筆者であっても、即答しづらい。したがって、主語つきの、いわゆる「倒置使役文」という構文は本当に実例のレベルで存在するならば、それは具体的にどういう文脈、状況の中で使われているのかを突き止め、明らかにする必要がある。本稿では「異物付着」の事態を表す主語ありの「倒置使役文」にフォーカスすることで、この問題に迫ってみたい。

2．2　無生物主語の使役文

以上は「倒置使役文」とよばれる文の実態である。動作対象が主語となるこの構文は、従来、無生物主語の使役構文としてとらえられている。郭姝慧２００６は「倒置使役文」が一種の「使役構造（causative construction）」であるとし、文の主語（本来の動作対象）を使役主（causer）としている。また、周红２００６でも、「倒置使役文」は結果事態の原因を「動作対象（〝客体〟）」に求めたことによって生じた使役構文であると述べている。これに対し、孙天琦等２０１５は「倒置使役文」を「潜在動補構造（〝隠性述结式〟）」とよび、動詞の意味構造の理論を援用し、ゼロ形式（〝隠性〟）の補語述語を想定することで、動作対象が結果事態の原因（＝使役主）として文の主語に立つメカニズムについて興味深く論じている。また、石村２０２０は、次の例文を取り上げ、「倒置使役文」が使役文として成立するようになったプロセスや使役性の由来について推論している。

（7）这盆脏衣服　洗　了　我　一身汗。（石村２０２０）
　このたらいの汚れた服　洗う　ＡＳＰ　私　全身の汗
「このたらいに入っている汚れた服を洗っていたら、全身汗だくになった。」

石村２０２０によれば、（7）は「我洗了一身汗（洗ったら、全身汗だくになった）」という自動詞文が、「外的使役主（〝外在致事〟）」である「这盆脏衣服（このたらいの汚れた服）」を新たに主語にし、そして本来の自動詞文の主語である「我（私）」が目的語の位置に移動したことで生じた使役構造であるとし、（7）の使役性はこの移動によるものと推論している。[5]

これらの研究に共通しているのは、「倒置使役文」は一種の使役文で、動作対象が結果事態を生じさせた原因（使役主）である、という見方である。しかし、「倒置使役文」の実例が少ないことからわかるように、本来は動作の対象である無生物を、事態全体の原因とみなし、主語に立てることは決して一般的なことではない。特に、使役構文において、事態の原因や使役主になるのは通常、行為の主体である人間などの有生性をもつものである。

たとえば、（7）を例に考えてみよう。話し手がある日、たらいに入っている汚れた服を自力で洗っていたら、全身汗だくになったとしよう。では、「汗だくになった」という結果事態を引き起こした原因事態は何かと言われると、真っ先に考えつくのは、恐らく「服を自力で洗おうとしたこと」であろう。この場合、「服を洗う」行為自体が原因である。実際、行為自体が原因として主語の位置に立つ「ＶＯＶ了我一身汗」の文は実例が多い。

（8）**洗　衣服**　洗　了　我　一身汗
洗う　服　洗う　ASP　私　全身の汗
「服を洗ったら、全身汗だくになった。」

このように、通常は行為自体が結果を引き起こす原因として見なされやすいのにも関わらず、[6]（7）のように行為を差し置いてまで、行為の対象である無生物を原因として主語に立てる動機や表現機能は何か。「倒置使役文」を使役文とするならば、なぜ動作対象が原因として見なされうるのかについて、考察する必要がある。本稿では、「異物が話し手自身の体に付着する」という事態に注目し、「倒置使役文」の実例を取り上げ、動作対象が事態の原因となる動機について探る。同時に、それ以外の主語あり文（例文（2））についても考察し、同じ事態を表す両者の使い分けについて検討する。

3　「異物付着」を表す倒置使役文

3．1　動詞「摸」の文

以下では、「異物付着」の事態を表す「倒置使役文」の実例をもとに、動作対象である無生物が事態を引き起こす原因（使役主）として主語となる動機や、こうした構文を用いる話者の事態に対するとらえ方について考えてみたい。従来の研究は主に作例を中心に分析を行っているのに対し、本稿では実際の用例にこだわりたい。母

語話者の語感に頼って作られた作例に比べ、実例には常にそれが用いられる前後文脈があり、かつ話者の事態に対するリアルな感じ方が観察されやすい。しかし、「倒置使役文」はその特異な構造からなのか、ＣＣＬといった書き言葉がメインのコーパスからは検出されにくい。[7] 一方、近年中国語のＳＮＳとして人気の高い、短文投稿サイト「微博（Weibo）」では、「倒置使役文」の実例を検出できる。李２０２３ではすでに「微博（Weibo）」の実例をもとに、「時間の損失」を表す「倒置使役文」とその関連構文について考察をしているが、今回は「異物の付着」を表す実例にフォーカスする。

（9）我妈妈　的　小电驴　后座　**摸**　了　我　一手　灰（微博）
　私の母　の　スクーター　シート　さわる　ＡＳＰ　私　手いっぱい　ホコリ
「母のスクーターのシートをさわったら、ホコリが手にいっぱいついてしまった。」

（10）为了　换　定位板　卫星轴　**摸**　了　我　一手　油（微博）
　ために　変える　基板　キースイッチ　さわる　ＡＳＰ　私　手いっぱい　油
「基板を変えるとき、キースイッチの油が手にいっぱいついてしまった。」

（11）就说　这面膜　怎么　**摸**　了　我　一手的　粘液（微博）
　そういえば　このパック　なぜ　さわる　ＡＳＰ　私　手いっぱいの　ねばねばしたも

の

「そういえば、なんでこのパックをさわると、手がねばねばするの。」

（9）では「シート（后座）」が「さわる（摸）」の動作対象でありつつ、「私（我）の手」をホコリまみれの状態にさせた原因（使役主）としてとらえられている。（10）では、「キースイッチ（卫星轴）」が「私（我）の手」を油まみれの状態にさせた原因である。（11）では、「このパック（这面膜）」がねばねばの原因である。ここで一旦、これらの「異物の付着」の事態に関わる参与者、参与物ついて整理したい。（9）～（11）はともに、「参与者（話し手自身）が、あるモノ（接触物）をさわり、そしてその接触物に付着している粘着物が話し手の手についた」というフレームをもつ。「手に異物がつく」という結果事態をもたらす原因は、「接触物にさわる」という行為と、異物の出ところである接触物。では、なぜ「行為」ではなく、動作対象の「接触物」が選ばれたのか。それは、行為（「接触物をさわる」）のほうがそもそも「原因」になれないくらい、弱いものだからではないか、と考えられる。

実際、（9）～（11）の文脈を見ると、動詞の「摸」は「さわる」という積極的な動作というより、「話し手が意図せずに、何かにふれてしまう」程度の消極的なものと推測できる。たとえば、（9）では話し手がスクーターをさわろうとして手にホコリがついたのではなく、スクーターをお母さんから借りて乗ろうとしたとき、シートのホコリが手についたのであろう。（10）はキーボードの修理で基板をいじるとき、キースイッチの油が手についたという状況である。（11）は、話し手が洗顔後、パックをしようとしたとき、なぜかパックにふれた手が

ねばねばする、という状況であろう。要するに、（9）～（11）において、主語と動詞の間に一応「動作対象：動作」という関係性が成り立つものの、動作者である話し手がはじめから、意図をもって主語の接触物をさわろうとしたわけではなく、別の行為をする中で、たまたまその接触物にふれてしまったのである。そして、その接触物にはある異物が付着しているので、そのせいで話し手自身にも異物が付着したのである。したがって、話し手は「接触物をさわろうとした」わけではないので、行為自体が「異物付着」の原因にはなりにくい。そのかわり、「接触物」のほうが、結果事態を引き起こしたより直接的な原因（使役主）として、「倒置使役文」の主語となったのだと思われる。

西村１９９８：１４５では、英語の使役構文の中には「原因」を主語とする構文があることに注目し[8]、原因が使役主となる必然性や条件について、「行為者のように特種の変化を引き起こす力を本来的に備えているとは考えにくい場合でも、特定の状況においてはそのような力に相当するものを投影することが可能な対象である――臨時的なエネルギー源と見なされている」と論じている。この観点をヒントに考えると、（9）～（11）の主語はまさに「臨時的なエネルギー源」といえる。なぜなら、動作者が積極的に変化を引き起こそうとしていない（＝接触物をさわろうとしていない）にもかかわらず、接触物自体の力、性質（＝異物が付着している）によって、話し手に変化を来したのである（＝異物を付着させた）。また、このように考えると、主語となっている接触物はもはや、「動作対象」とは言いにくいことがわかる。動作主（話し手）が積極的な働きかけをしていない以上、接触物は動作対象ではなく、「異物の出ところ」や「エネルギー源」として見るべきであろう。

ここで、以上の説に対し検証をしてみたい。「話し手が積極的にさわろうとしたのではなく、何かの拍子に異

物が付着した」ことが（9）～（11）の成立条件ならば、逆に「話し手が最初から意図をもって積極的に何かをさわろうとしたときには、たとえ結果事態が同じでも、接触物を主語にした「倒置使役文」は正しい文として成立しない」ということが予想される。実際、「意図的行為」を表す次の主語なしの実例を、「倒置使役文」に変換できない。

（12）我的车也太脏了 刚去后备箱拿东西**摸了我一手灰**[9]（微博）

「私の車はまぁ汚い。さっきトランクからものを出そうとしたら、手がホコリだらけになってしまった。」

（12′）?后备箱摸了我一手灰

（12）の事態は、「私の車は汚い。車のトランクを開けて、中にある荷物を出そうとしたら、トランクのホコリが手に付着した」である。このフレームにおいて、「接触物」は「トランク（后备箱）」であるが、（12′）が成立しないのは、話し手が荷物を取り出すために「トランク（后备箱）」の中をまさぐったからであろう。この場合、行為が意図的なものであるため、「エネルギー源」としての「トランク（后备箱）」の存在感が薄く、逆に動詞「さわる（摸）」の動作対象としてのイメージが強い。（12′）の不成立から、動作対象としての役割が強ければ強いほど、かえって「原因（使役主）」として主語の位置に立つことが難しいことが見てとれる。結局、働きかけられる側（動作対象）というのは、使役の事態において、変化を受ける被使役者（causee）になるものであって、

本来は使役主（causer）とは真逆の概念である。中国語の「倒置使役文」において、「動作対象」が「原因（使役主）」になるという言語現象は一見この真理に反するものに見えるが、（9）～（11）で見たように、主語がいわゆるプロトタイプの「動作対象」ではなく、むしろ「エネルギー源」として話し手に「働きかける（異物を付着させる）」側のものとしてとらえられる。いわば、これらの「接触物」は「動作対象」という意味役割を手放したことで、それと引き換えに「原因（使役主）」となったのである。以下の実例も主語なしの文（下線部）であるが、話し手自身が料理しようとしておたまを手に取ったので、「おたま（塑料勺子）」を主語にした（13'）は前の文脈と整合性がとれず、文の許容度が落ちる。

（13）　我进厨房做午饭、拿起塑料勺子摸了我一手油。（微博）

「キッチンに入って昼ごはんを作る。プラスチックのおたまをもったら、手が油まみれになってしまった。」

（13'）?塑料勺子摸了我一手油。

以上で、「異物の付着」を表す「倒置使役文」の成立条件が明らかになった。これに伴い、こうした文には「自分が何かをやったわけではないのに、なんでこうなるんだ」という驚きや不満の気持ちが込められている。話者は事態を、「予測していなかったハプニング」としてとらえているのである。「倒置使役文」はこうした意味

や表現機能をもつと考えられる。

3．2 「異物付着」を表す三種の表現

ここでひとまず、「異物付着」という同一の事態を表す中国語の三種の表現方法についてまとめておこう。一つは、次の（14）のような、通常語順の文である。（14）は1章の（1'）と同じ構造である。

タイプ①―「我ＶＯ，Ｖ了一Ｎ異物（付着物）」

（14）我有点不忍心就摸了摸它，结果摸了一手的油。（微博）

「私は同情心で猫をなでてみたが、油が手にいっぱいついてしまった。」

（14）では前の文で、「話し手のところに突然、あまり可愛くない猫がやってくる。自分好みの猫ではないと感じつつも、その猫がしきりに甘えてくるので、そこで思わずなでてみることに…」ということが書いてあるので、話し手自身の意図で積極的に「猫をさわった（なでた）」ことがわかる。「手に油がつく」という結果事態が生じたとはいえ、自分が意図して行った行為による結果なので、「倒置使役文」の場合に見られる話し手の驚きや不満感があまり感じられない。次は、2章で取り上げた（3）（6）のような「主語なし」文である。主語をもたないが、動作者である「私（我）」が目的語の位置にあることは「倒置使役文」との共通点である。

タイプ②―「我ＶＯ，Ｖ了我一Ｎ異物（付着物）」

（13）我进厨房做午饭，拿起塑料勺子摸了我一手油。（微博）

タイプ②は、「話し手の自らの意思で何かを仕掛ける（ex：「何かをもつ、さわる」）」という点でタイプ①と共通している一方で、行為の結果が予想外で、話し手がそれに対し驚きや不満を感じている点では逆に、次のタイプ③―「倒置使役文」と共通している。わかりやすくいえば、タイプ①は「話し手が何かをやろうとした結果、異物が体に付着してしまった」ことをニュートラルに述べているのに対し、タイプ②は「話し手が何かをやろうとした結果、なぜか異物が体についてしまった」ことを嘆く文である。[10] そして、タイプ③は「異物付着」の事態をまるで、「何らかのモノが自らの異物を、静止状態の話し手に付着させた」という擬人化のイメージでとらえる。話し手からすれば、自分の意思とは関係ないところで起きた予想外の事態なので、当然驚きや不満といった気持ちが込められている。

タイプ③―「ＳＶ了我一Ｎ異物（付着物）」

（9）我妈妈的小电驴后座**摸**了我一手灰。

よって、この三種の表現方法は、同一の結果事態を表しているとはいえ、それぞれが使用条件や表現機能の面で異なった特徴をもつことがわかる。三者の実例を見る限り、タイプ③の「倒置使役文」は出現頻度が低く、成立条件や使用状況の制限がより強いと思われる。特に、主語に関しては、名詞フレーズの特定性（definiteness）、特定しやすさ（accessibility）が求められる。これまで取り上げた「倒置使役文」の例文を観察するとわかるように、主語が指示詞の「这」や「那」を含んでいるものが多い。該当する例を以下にまとめる。

（1）**这张桌子**摸了我一手油。
（4）**那个报告**写了我一晚上。
（5）**那碗面吃**了他一头汗。
（7）**这盆脏衣服**洗了我一身汗。
（11）就说**这面膜**怎么摸了我一手的粘液

太字となっている、主語のフレーズがすべて「这」か「那」を含んでいることがわかる。これらのフレーズから「这」、「那」をなくし、裸の名詞の形にすると、以上の「倒置使役文」は正しい文としての許容度が落ちる。

（1”）？**桌子**摸了我一手油。
（4”）？**报告**写了我一晚上。
（5”）？**面吃**了他一头汗。
（7”）？**脏衣服**洗了我一身汗。
（11”）？就说**面膜**怎么摸了我一手的粘液

したがって、主語となる名詞フレーズは特定性、指示性の強いものであることが、「倒置使役文」を成立させ

る統語面での重要な条件であるといえる。[11] しかし、この点に言及している先行文献がほとんどなく、なぜ指示性の高い名詞句のみが主語になれるかについては不明である。本稿も現時点ではこの問題に対して妥当な解釈を見つけていないため、深入りすることができないが、主語は結果事態を引き起こした「原因（使役主）」と見なされている以上、かなり際立ったモノ、特定しやすいモノである必要があるように思う。また、「倒置使役文」には話し手の驚き、不満の気持ちが含まれており、こうした気持ちは主に原因となった主語（名詞フレーズが表すモノ）にぶつけられているため、「非難の矛先」としての主語は当然、「既知」で際立ったモノでなければいけないと思われる。この高い特定性、指示性は指示詞である「这」「那」を用いて示す以外に、次のように読み手・聞き手がより特定（アクセスする）しやすいように、フレームを共有している「参照点（reference point）」を用いる場合もある。次の2例における太字の部分は、原因である名詞（下線部）を特定するための「参照点」となっている。

（9）**我妈妈**的**小电驴**后座摸了我一手灰

（10）**为了换定位板**卫星轴摸了我一手油

（9）では、「母」→「スクーター」→「シート」の順で主語の「シート（后座）」にアクセスできる。（10）では、「キーボードの修理」→「基盤」→「キースイッチ」の順で原因の主語にたどりつくことができる。こうした形の主語は、指示詞「这」「那」を用いた主語ほどの強い特定性がないものの、「話し手が何に対して不満を感

じているか」は聞き手・読み手に十分伝わる表現となっている。一方、（9）（10）から太字の部分を取り除いた次の文は、やはり正しい文としての許容度が落ちる。

（9”）?后座摸了我一手灰
（10”）?卫星轴摸了我一手油

「異物付着」を表す三種の表現の使い分け、意味や表現機能上の違いについては以上で明らかになった。この章の締めくくりとして、最後は「異物付着」の事態を構成する動作者（話し手自身）、行為（さわる）、参与物（接触物、異物）が中国語においていかに言語化されているのか、および言語化の順番という観点からもう一度整理したい。

通常語順をもつタイプ①は「摸了摸它，结果摸了一手的油」のように、まず行為を述べてから結果事態を言い表す。「異物付着」の結果事態では、動作者が「主語」、行為が「動詞」、付着物が「補語」として言語化される。「異物」の出ところ（接触物）は同じ文の中には現れず、前の文の目的語として言及される。タイプ②は「拿起塑料勺子摸了我一手油」のように、タイプ②と同様「行為」と「結果事態」の二段階で言語化する。結果事態では、動作者が動詞の目的語の位置に置かれる。タイプ③は「倒置使役文」なので、行為と結果を一つの文で言い表しており、「～をして、～になった」という二段階の表現方法ではない。接触物が原因として主語に、動作者が目的語の位置に置かれているため、「異物付着」の結果事態はいわば、「主語に立つ接触物が話し手に異物を付

着させた」というイメージで事態をとらえる。三種の表現は、同一の事態に対し単に表現方法が異なるだけでなく、とらえ方まで異なることがわかる。

4 「異物」が主語の文

3章での考察はすべて、「さわる」という意味の動詞「摸」を用いた例である。本章では、同じく「異物付着」の事態によく用いられる動詞「蹭」の文を取り上げ、動詞「摸」の文と比較し、両者の構文的なふるまいの共通点と相違点について考えてみたい。「つく、ふれる」といった自動詞的用法をもつ「蹭」は、動詞「摸」と違い、「異物」を主語にすることができるが、そうした文の分類や、表現機能などについてはこれまであまり議論がなされていない。本章では実例を通して分析を試みたい。

4．1 動詞「蹭」と無生物主語文

辞書で「蹭」を調べると、「つく、つける、こする、こすりつける」といった複数の意味、用例が取り上げられており、それを区別し使い分けることは、中国語学習者にとって決して容易なことではないが、「蹭」が現れる構文が重要な判断材料となる。たとえば、焼肉屋のような油がたくさん出る場所にいて、不注意で「手に油をたくさんつけてしまった」というときは次のように言い表す。

（15）我　**蹭**　了　一手　油。
　　私　つく　ASP　手いっぱい　油
「私が手に油をいっぱいつけた。」

この場合、「蹭」は「つける」という他動詞的意味で用いられている。この状況はまた、（3）やタイプ②などの「主語なし文」の形で表現できる。

（16）**蹭**　了　**我**　一手　油。
　　つく　ASP　私　手いっぱい　油
「手に油がいっぱいついてしまった」

（16）は二種類の解釈をもつ。一つは、（15）の「我蹭了一手油」における「我（私）」が目的語の位置に移動した形という解釈で、つまり（15）と（16）の違いは、これまで見てきた例（（3）と（3'））と同様、両者は結果事態に対する話者の驚き、不満を含むか否かで異なる。もう一つの解釈は、（16）の主語が省略されており、その省略された主語のモノが、「私の手に油をつけた」という解釈できる。なぜこの解釈が成り立つかというと、「蹭」はもともと無生物のモノを主語にとることができる動詞で、次のような無生物主語の文が難なく成立できるためである。これは、日本語の「つける」と中国語の「蹭」の最も大きな違いであろう。日本語では「私が手

に油をつけた」といえるが、「*この鍋が私の手に油をつけた」とはいえない。しかし、中国語ではこうした表現が成り立つ。

（17）这个锅　**蹭**　了　我　一手　油。
この鍋　つく　ASP　私　手いっぱい　油
「この鍋の油が手にいっぱいついてしまった。」

（17）のような表現が成り立つのは、実は「蹭」に「つける」ほどの意味がない、からではないかと筆者は考える。「蹭」はもともと二つのものが「接触する」、「ふれる」、あるいは「こすれる」といった動作を指す動詞であるが、「油がつく」や「油をつける」として訳せるのは「蹭」が入った構文全体の意味の貢献もあると思われる。構文全体の意味に惑わされずに、「蹭」を純粋に「接触する」「ふれる」「タッチする」といったイメージでとらえると、（17）の文を少しは受け入れやすくなるのではないか。

動詞「蹭」が無生物主語をもつことができるということと関連して、ここでもう一つ面白い問題が起きている。すなわち、（17）ははたして「倒置使役文」かどうかが判断できないという問題である。「这个锅（この鍋）」を文の本来の主語（動作主）と考えるならば、もちろん「倒置使役文」ではない。一方、（17）は「我蹭这个锅，蹭了一手油」という文から、主語と目的語が反転することで生じた形と解釈するなら、立派な「倒置使役文」といえる。本稿はもちろんこの問題を解決する術はないが、「接触物（異物の出ところ）」が主語となる（17）のよ

うな文は「微博」での出現率が比較的高く、動詞「摸」の場合よりも見つかりやすい。

（18）外皮上　的　文字　**蹭**　了　我　一手　黒（微博）
表紙　の　文字　つく　ASP　私　手いっぱい　黒
「表紙の文字で手が真っ黒になってしまった。」

（19）劣质的纸盒包装还**蹭**了我一手擦不掉的闪粉（微博）
「外側の粗悪な紙の箱についているキラキラした粉が、手にいっぱいついてしまって、洗い落とせない。」

（17）～（19）の分類問題はさておき、こうした例からは、「蹭」と「摸」は同じ事態を表す同じ形の文を作ることのできる、類似点の多い動詞であることがうかがえる。両者の違いは、「話し手の自らの意思で、積極的に対象物にふれる（「摸」）」か、または「話し手が意識していないところで、接触物にふれてしまう（「蹭」）」かにある。そして、前章で論じたように、「倒置使役文」や（17）～（19）のような無生物主語の文が成立するには結局、「話し手の意図的な働きかけがない」ことが必要となる。この点がわかれば、「蹭」のほうが「摸」よりも、無生物主語文が作りやすいことが自然と納得がいく。

4．2「異物」主語文について

以上は、動詞「蹭」と動詞「摸」が作る構文の共通性である。両者はともに、「異物付着」という結果事態を、(15)、(16)、(17) のような三種の構文で言語化できる。この三種の構文は、動詞「摸」の分析で取り上げたタイプ①、タイプ②、タイプ③と同じであるといってよい。整理のため、もう一度少し簡略化して以下に示す。

タイプ①：我 V 了 一 N 異物

タイプ②：V 了 我 一 N 異物

タイプ③：S（無生物）V 了 我 一 N 異物

ただし、動詞「蹭」は動詞「摸」よりも、タイプ③の文を用いた実例が見つかりやすい。この違い以外に、「蹭」は「異物」を主語にすることができる点においても、「摸」と異なる。実例を少し取り上げる。

(20) **巧克力**　蹭　了　我　一手（微博）

チョコレート　つく　ASP　私　手いっぱい

「チョコレートは手にいっぱいついてしまった。」

(21) **你　的　臭汗**　蹭　了　我　一手臂（微博）

あなた　の　臭い汗　つく　ASP　私　腕いっぱい

「あなたの臭い汗が私の腕にいっぱいついてしまった。」

（22）下次不用这支笔写了，**墨**蹭了我一手　（微博）

「次はもうこのペンで書かない。インクが手にいっぱいついてしまった。」

（20）～（22）は、主語が表す「異物」が話し手の体（の一部）に広がったことを表す文である。従来の研究において、「異物」は「結果」を表す「補語」としてとらえられており、動詞の動作対象ではないため、これらの文は「倒置使役文」に該当しない。[12] 該当しないものの、こうした構文についても考察すべき問題はある。たとえば、「蹭」と意味、用法の近い「摸」はなぜ、この構文に生起しにくいか。「異物」を主語とする「摸」の文は短文投稿サイト「微博」ですら見つかっていない。（20）～（22）の動詞を「摸」に変えると、文の許容度が落ちる。

（20”）？**巧克力**摸了我一手

（21”）？**你的臭汗**摸了我一手臂

（22”）？**墨**摸了我一手

なぜ動詞「摸」が「異物」を主語とする文にそぐわないか、について考えることは、こうした構文全体の表現機能、とらえ方を理解することにつながるが、本稿ではこの問題について明確な答えをまだ得ていない。ただ、

可能性として考えうるのは、動詞「摸」の他動性に起因しているのではないかと思われる。「さわる」を意味する「摸」は他動詞なので、通常は主語の位置に、自らの意思で動くことのできる「動作主」がくることが必要である。しかし、(20”)～(22”)における「巧克力(チョコレート)」「汗(汗)」「墨(インク)」は無生物なので、「摸」が求める「動作主」の条件に合わず、結果として文全体の印象が悪くなる、ということが考えられる。では、なぜ同じく「無生物」を主語とする「倒置使役文」が許されるかというと、文の最後の位置に「異物」を表す名詞が用意されているからであろう。すなわち、「倒置使役文」がもつ「S(無生物)V了我一N**異物**」という形は「異物」を文の最後に回し、通常の文の形に近づけることで、S(無生物)が他動詞の前にくる「違和感」を解消していると考えられる。

もう一つの可能性は、「異物」を主語とする構文の、結果事態に対する「静(static)」的なとらえ方が、「摸」がもつ他動性と互いに抵触していることも考えうる。少し循環論的な議論になってしまうが、少なくとも、他動性の高い「摸」がこの構文に生起しにくいということから、構文自体が他動性をもっておらず、事態の結果のみに注目した「静(static)」のものであることがうかがえる。つまり、(20)～(22)は結果事態を一種の状態としてとらえ、言語化した構文であると考えられる。この点に注目すると、「異物」が主語となる(20)～(22)の表現機能も自ずと見えてくる。すなわち、これらの文が伝えたいのは、「異物」であるチョコレート、汗、インクのありかである。前の文脈(紙幅の関係で省略)で述べている何らかの行為によって、「そうした異物は現在、自分の体の一部に広がっている」ことを聞き手・読み手に伝えているのである。この表現機能は、モノを主語とする動詞「在」の文や、「S(無生物)V了一地」の文と類似している。

（23）巧克力　在　桌子上。
チョコレート　ある　机上
「チョコレートは机の上にある。」

（24）巧克力　撒　了　一地。
チョコレート　こぼれる　ＡＳＰ　床いっぱい
「チョコレートは床いっぱいにこぼれた。」

この二つの文はともに、チョコレートのありかを伝える、「静（static）」的な「状態」を表す文である。（20）～（22）もこうした文を彷彿とさせる。結果を状態としてとらえているため、他動性の高い動詞と相容れないのであろう。本稿では、この問題に対して妥当な説明、確たる論拠を与えることができなかったが、今後も「異物」を主語とする構文について考察を続けたい。最後に、本章で取り上げた動詞「蹭」が作る構文を以下にまとめる。

タイプ①：我　蹭了　一　Ｎ異物
タイプ②：蹭了　我　一　Ｎ異物
タイプ③：Ｓ（無生物）蹭了　我　一　Ｎ異物

タイプ④：S（異物）蹭了我一N

5　今後の課題

本稿では、「異物が話し手の体に付着する」ことを表すいくつかの構文を取り上げ、同一の事態を表すこれらの異なる構文の成立条件や表現機能について、「倒置使役文」を中心に考察してきた。通常語順の文（タイプ①）に比べ、主語なしの文（タイプ②）には話者の結果に対する驚きや不満の気持ちが込められている。また、異物の出ところ（「接触物」）を主語に置く「倒置使役文」（タイプ③）は、「動作者が無意識のうちに対象のモノにふれてしまう」という場合に成立しやすい。しかし、タイプ②とタイプ③に見られるこうした意味の面での特徴はいかにして生じたのか、両者がもつ「有標（marked）」的な文法特徴といかに結びついているのかについてはまだ不明な点が多い。そして、4章では「異物」を主語に置くタイプの構文についてもふれているが、なぜ他動性の高い動詞「摸」がこの構文を作りにくいかについてはまだ納得のいく答えが見つかっていない。この二つの問題について、今後引き続き考察が必要となる。こうした考察を通して、中国語における「無生物主語文」の全体像の解明に寄与したい。

〈参考文献〉

Gu, Yang（1997）. On defining causativity and the significance of discourse information. Text & Talk, 17（4）, 435-455. https://doi.org/10.1515/

text.1.1997.17.4.435
郭姝慧（２００６）「倒置致使句的类型及其制约条件」。『世界汉语教学』、（２）：40–50。
李菲（２０２１）「中国語倒置使役文と関連構文」。『東京大学言語学論集』、（43）：103–117。
李菲（２０２３）「実例でみる「ＳＶ了〈我〉時間」構文」。『外国語教育研究ジャーナル』、（４）：66–78。
西村義樹（１９９８）「行為者と使役構文」。中右実・西村義樹著『構文と事象構造』、東京：研究社
石村广（２０２０）「致事型数量动结式的产生机制—致动用法的发展和变异」。『当代语言学』、（22）：1–16。
孙天琦、郭锐（２０１５）「论汉语的〝隐性述结式〟」。『语言科学』、（５）：459–472。
周红（２００６）「客体致使句的认知语义分析」。『语言研究』、26（３）：20–25。

〈コーパス〉
ＢＣＣ：北京语言大学语言智能研究院语料库
ＣＣＬ：北京大学中国语言学研究中心

《注》

（1）ＡＳＰはアスペクトマーカーを指す。

（2）孙天琦等２０１５では、「机をさわって、その結果、机の油が手につく」における「油」を動詞の動作対象とはみなしていない。動詞「さわる」の動作対象は「机」であり、「油」は動詞の結果を表す補語としてとらえられている。よって、「油」を主語とする（2）は「倒置使役文」ではないため、取り上げられることがほとんどない。

（3）「異物が体に付着する」事態は中国語において、（1）、（1'）、（1''）、（2）の四通りの表現方法があるならば、その違いを明確にすることは、

中国語教育の観点から見ても大事である。目の前にある事態に対し、学習者がどのような場合に（1）を、またどのような場合に（1'）や（1''）、あるいは（2）を使えばいいかを自ら判断できることが、中国語を正しく使えているかどうかに関わってくる。本稿はこうした中国語教育の視点を取り入れつつ、様々な問題について考えてみたい。

（4）（3）の「等了我一天」は「一日待たされた」という意味以外、通常の他動詞文として「（誰かが）私を一日待っていた」ことを表す。この場合、「我（私）」が動詞「待つ」の動作対象である。

（5）石村２０２０では「倒置使役文」を「使役型数量動補構造（〝致事型数量动结式〟）」とよんでいる。

（6）西村１９９８：１４４では、英語の言語事象をもとに、「基礎行為」が使役主として主語になる現象について、次のように分析している。

〈基礎行為〉の遂行者、〈基礎行為〉自体、〈基礎行為〉から生じる結果をそれぞれX、Y、Zとすると、ある種の使役構文でXのみならずYも主語になりうるのは、XとYのいずれもが、それがなければZが生じない（あるいは、それがあるからこそZが生じる）という意味で、Zを生じさせる力がある（あるいはZが生起する原因である）と見なされうることに基づいて、〈使役行為者〉のカテゴリーが（特に英語において）XからYへと拡張されているからであろう。

中国語でも、「倒置使役文」のような、動作対象である無生物が使役主として主語になるという言語現象がもし存在するなら、このように「行為者（動作主）」を主語とする通常の使役構文との類似性や拡張の動機、プロセスについて丁寧に分析すべきである。

（7）「倒置使役文」である（1）の一部「摸了我一」を取り出し、これを含んだ実例が実際にどのくらい存在するかを調べるべく、ＣＣＬで検索したところ、計3例見つかったが、主語をもつ「倒置使役文」は検出されておらず、異物付着を表す例は次の、主語なし文のみである。この文は（3）、（6）と同じ構造をもつ。この結果からも、「倒置使役文」の実例の少なさがうかがえる。

（前略）还**摸了我一手新鲜的绵羊油**。（ＣＣＬ）

（その上、フレッシュな羊油が手にいっぱいついてしまった。）

（8）西村１９９８：１４５-１４５で取り上げられている英語の、原因が主語となる使役構文をここに再掲する。太字の部分が原因主語である（太字は筆者によるものである）。

What makes you think so? / **What** took you to Alaska? / **That** explains it. / **That** reminds me.

（9）（12）のように、前後文脈を示すため長くなった実例については、日本語訳のみを示し、逐語訳を省略する。

（10）タイプ②とタイプ①の違いは、2章でふれた（3）の「等了**我**一天」と（3'）の「**我**等了一天」の違いと同じである。通常語順の「**我**等了一天」は「一日待った」ことをニュートラルに伝えているのに対し、動作主の「我（私）」を目的語の位置に置く「等了我一天」は、「一日も待たされていたんだ」というように、驚きや不満の気持ちが含まれている。こうしたニュアンスは、「我（私）」を目的語の位置に置くことで生じたものであり、通常語順の「**我**等了一天」に対し、形と意味の両面で有標的（**marked**）である。したがって、（3）と同じ形をもつタイプ②も、通常語順のタイプ①に対し、有標的な構文であるといえる。この、主語をもたず、動作主の「我（私）」のみを目的語に置く、有標的な「V了我一N」構文がいかにして生じたのかについての考察が必要であるが、管見の限り、まだ研究がなされていない。本稿ではこの問題に立ち入る余裕がないが、今後の研究で引き続きこの問題について考えていきたい。

（11）郭姝慧２００６：47では数量詞（助数詞）を伴う名詞フレーズが主語となる例を取り上げているが（ex：「一本书找了我整整一下午（たった一冊の本を探すのに、午後の時間がすべてとられた）」）、こうした構文には「簡単に済ませそうなことで、思いの外長時間とられてしまった」という意味が含まれている。よって、主語に立つ「一＋数量詞＋N」の形をもつ名詞フレーズは不特定のものを表しているのではなく、「たった一つの～で」という意味を含意している。

（12）（20）～（22）が「倒置使役文」に該当しないことは、先行研究に直接書かれているわけではない。筆者が従来の「倒置使役文」に関する定義、分析をもとに下した判断である。もっとも、（20）～（22）のような「異物」を主語とする構文についての記述、分析があまり見られない。「倒置使役文」に関する論文でも、こうした文を取り上げているものが、管見の限り、見られない。